



Title	ヒンドゥー教の葬祭と死生観 : 『葬祭の光明』 訳註 (1)
Author(s)	虫賀, 幹華
Citation	印度民俗研究. 2025, 23, p. 3-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒンドゥー教の葬祭と死生観
— 『葬祭の光明』 訳註（1） —

虫賀 幹華

はじめに

本稿は、北インドのウッタール・プラデーシュ州ゴラクプルにある出版社ギター・プレスより出された『葬祭の光明』の冒頭で述べられる「必ず知っておくべきこと」と題された章（4～11頁）の訳註である。全424頁の本書の大部分は、葬送儀礼から祖先祭祀まで、サンスクリット語のマントラをとまなうヒンディー語での儀礼手順の説明に割かれており、儀礼執行に際し聖職者が参照する手引書の様相を呈する。他方で、「死に瀕した際に行うべき儀礼」章（54頁～）で儀礼過程の説明が始まるまでは、葬祭に関する事項が、サンスクリット語の^{ダルマシャストラ}「法典」やプラーナ聖典などからの典拠とともにヒンディー語で解説されている。儀礼手順を示す章のなかでも、各儀礼の背景にある死生観を解説する部分がある。ヒンドゥー教の葬祭の概略や死生観を理解するのに非常に役に立つ書籍であるため、抜粋しながら順番に訳註をおこなう。本稿はその第一弾である。

本書の最初に付されているギター・プレスの編集長ラーデーシャーム・ケムカーの言葉によれば、正しい儀軌に基づいた葬祭を行わせることができる聖職者がほとんどいないという状況、葬祭の手引書はおおよそサンスクリット語でしか入手できないため一般人が内容を知ることができないという状況に鑑みて、人が死に瀕したところから祖先祭祀まで、葬祭に関する「完全な本をわかりやすいヒンディー語で準備し、一般の人が聖典の記述に従って、最期の儀礼や祖先祭祀の重要性、その絶対的な必須性、葬祭の過程とその儀軌に関する一般的知識を得ることができるようにとギター・プレスは決定を下した」¹。著者である3人のバラモンはギター・プレスに依頼され、サンスクリット語の葬祭に関するさまざまな文献

¹ 編者の言葉では、膨大な数のサンスクリット語の祖先祭祀の手引書にはさまざまな見解がみられ、民俗レベルでも多様な伝統があるのに対し、本書ではそれらを調和させ決定的な手引書を作ろうとしたこと、記述の典拠としてサンスクリット語文献からの引用をできるだけ示そうとしたことが述べられている（3頁）。ギター・プレスによる「統一的ヒンドゥー教」形成の意図や実際の影響、その形成にあたり何を重視しているのかといったことについては、稿を改めて論じたい。

にあたり、この本を準備したという（3 頁）。

編者の言葉にあるように、本書はサンスクリット語の葬祭の手引書と、現代の一般信徒およびそれほど知識のない聖職者をつなぐ役割を果たすものである。実際どのように葬祭が行われ、一般のヒンドゥー教徒がどのような死生観を持っているのかがこの本から完全にわかるわけではないが、少なくとも「現代において、聖典の記述に基づく規則として正しいとされること」を知ることができる。本書は 2005 年の出版以来、版を重ね 2021 年時点で 30 刷、計 16 万 2 千部が印刷されている。訳者の実感としても、2011 年から 2016 年のあいだに調査をしたウツタル・プラデーシュ州のイラーハーバード（プレーヤグラージ）とバナーラス（ヴァーラーナシー）、ビハール州のガヤーにおいて、「葬祭に関して網羅的で最も良い本」という認識が持たれていたこと、実際に参照している人を何度も見かけたことを記しておく。本書を参照して執行されていた葬祭の様子を動画に撮りながら、本に書いてあることを再現しているだけの儀礼の撮影にどれほどの意味があるのかと感じたものである。一般信徒や聖職者に死生観についてインタビューした際には、「素晴らしい本を持っているのになぜ私に聞くのか、本にこそ正しいことが書いてある」として、個人の考えを伝えてもらえないこともあった。

「現代において、聖典の記述に基づく規則として正しいとされること」を提示するという本訳註の意義について、別の角度からも説明しておきたい。こうした現代語で書かれたヒンドゥー教の宗教文献は、サンスクリット語文献を参照しない現代インド研究や、古典のみを扱うインド文献学といった学問領域では、扱いきれないものである。ヒンディー語で解説されているとはいえ、権威とされるサンスクリット語文献の記述を根拠として、それに基づいて文章が書かれている。引用されているサンスクリット語の文章を読解し、ヒンドゥーの葬祭に関する知識があつて初めて理解できる箇所も多い。他方で、現代の葬祭の実践状況を知るには、サンスクリット語文献の記述がどのように解釈され、現代における規則としてどのように提示されているのかを見る必要がある。例えば、現代まで実施されている祖先祭祀の形態である「シュラーツダ」が初めて記述された「^{グリフキーストラ}家庭経」

という種類の文献群（紀元前4,3世紀頃～）では、毎月の朔の日に行われる「節目のシュラーツダ」がシュラーツダ儀礼の基本となっている。それはヴェーダ儀礼の新月満月祭の一部である^{ピンダ・ピトリ・ヤジュニヤ} 団子祖霊祭がモデルとなっており、ヴェーダ儀礼における^{ピトリ} 祖霊への儀礼もこの朔の日の儀礼が基本形であった。その後、様々な法典やプラーナ聖典で、シュラーツダの記述はさらに複雑になっていく。しかし、現代のヒンドゥー教徒が毎月の朔の日に祖霊への儀礼を行なっているか、あるいは法典やプラーナ聖典で規定されたすべてのシュラーツダを行なっているかといえそうではない。以下に訳すように『葬祭の光明』では、毎年の祥月命日と^{ピトリ・バクシヤ} 祖霊の半月（アーシュヴィナ月黒分の15日間）には必ずシュラーツダを行うように指示している。これは北インドでの調査で観察した実態とも合っていると感じる。聖典の記述と折り合いをつけながら、現代における実践を考慮しながら、書かれている本書から得られる情報は非常に多い。

最後に、訳註の凡例を記しておく。

・シュラーツダは「祖霊祭」と訳されることも多いが、本稿ではカタカナで「シュラーツダ」と記す。「祖霊祭」の原語として想定されるのはむしろピトリ・ヤジュニヤであるが、シュラーツダとピトリ・ヤジュニヤは完全に同じものを指しているわけではない。祖霊に対するさまざまな儀礼を一緒くたに「祖霊祭」と訳さず、それぞれを区別すべきであると考え。なおピトリは慣例に倣って「祖霊」と訳す。

・ヒンディー語で書かれた原書の本文には、随所でサンスクリット語での記述がみられる。サンスクリット語の引用により論述に権威をもたせようとしている原書の雰囲気再現のために、フォントを変え、原書の本文で引用されたサンスクリット語部分の日本語訳はイタリック体で示す。聖典からの引用である場合には、註にサンスクリット語の原文を示す。

・引用されたサンスクリット語詩節の翻訳が原書の本文でなされている箇所（「すなわち（*arthāt*）」という語で示される）は、ヒンディー語の翻訳になるため、イタリック体にしない。

・原書では、サンスクリット語聖典からの典拠は、本文での引用よりも多く註で詳しく示されている。【原註】と明記して註で原文を引用し、イタリック体にせず日本語訳を付す。

・（）で示されるのは原書にある補いである。

・原書にない、訳者による補いは [] で、説明としての補いは <> で示す。

謝辞

『葬祭の光明』の日本語訳および出版の許可をくださったギター・プレス社に深く感謝申し上げます。

使用テキスト

Pāṇḍey, Joṣaṅrām, Lālbihārī Mīśr, and Rāmkr̥ṣṇ Śāstrī. *Antyakarm-śrāddhprakāś*. [Maraṅāsann-avsthāke kṛtyōsahit sampūrṇ śrāddhprakriyākā nirūpaṅ.] *Parīṣkṛt evaṅ parivardhit saṃskaraṅ*. Gorakhpur: Gita Press, 2009 (2005).

参考文献

Aiyangar, K. V. Rangaswami (ed.). *Bṛhaspatismṛti*. Baroda: Oriental Institute, 1941.

Bhaṭṭa, Sītārām (ed.). *Muhūrtacintāmaṅi*. Pan. *Pyārelāl-Mīśra-kṛta-anvaya-bhāṣāṭīkāśahitaḅ*. Benares: Chunnūlāl Jñānacand Sanskrit-pustakālay, 1939.

後藤敏文「śrāddhā-, crēdō の語義と語形について」印度学宗教学会『論集』第 34 号、2007 年、61～78 頁。

Griffith, Ralph T. H. *Hymns of the Atharvaveda: Translated with a Popular Commentary*. Complete rev. and enl. ed. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Private Limited, 1985 (1895-96).

Kane, P. V. *History of Dharmasāstra, vol. I, part II*. Third edition. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1997.

———. *History of Dharmaśāstra, vol. IV*. Third edition. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1991.

古賀勝郎・高橋明編『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店、2006年。
Monier-Williams, Monier. *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1899.

Olivelle, Patrik. (ed. and trans.). *The Law Code of Viṣṇu: A Critical Edition and Annotated Translation of the Vaiṣṇava-Dharmaśāstra*. Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 2009.

———. *Yajñavalkya: A Treatise on Dharma*. Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 2019.

渡瀬信之訳『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』中央公論社、1991年。

『葬祭の光明』（4～11 頁）訳註

必ず知っておくべきこと

シュラッターの定義

祖霊たちを対象にして、規則通りに、^{シュラッター}信仰心をもって行われる行為をシュラッターという²。シュラッターからシュラッターという言葉が生まれたのである。

「シュラッターを目的とするこれがシュラッターである」「シュラッター

² シュラッターの基本的な意味は「信を置くこと」である。ブラーフマナ文献におけるシュラッターが、祭式における「正しいマントラ、行作、式次第の執行と、それが構築し実現するメカニズムへの信頼、確信」であり、「祭主とブラフマン祭官の一蓮托生というべき信頼関係に集約される」（後藤 2007: 570）ことを踏まえると、ここでシュラッターの執行と関連させられているシュラッターは、「儀礼を取り仕切る祭官および儀礼の効果に対する信頼」のことだろうとまずは考えられる。しかし、ヴェーダ文献（サンヒターおよびブラーフマナ）からアヴェスタ、さらにラテン語までの「シュラッター」にあたる語の用法からその語義を検討した後藤敏文であっても、シュラッターからシュラッターが派生したことは確実としつつ、「どのような経路を通じて、『信（頼）に属する、に由来する』から『祖霊祭』の意味が展開したのかは不明」（前掲: 569）としているように、一筋縄ではいかない問題である。他方で『葬祭の光明』では、シュラッターが神への帰依を意味するバクティと並列されたり、シュラッターの語がバクティに代えられたりしている箇所がある（「祖霊たちにとってシュラッターはどのように獲得されるのか？」「十分な財がない場合でもシュラッターを完了させられること」「祥月命日および祖霊の半月においてシュラッターの執行が必須であること」）。先述のブラーフマナ文献でのシュラッターの用法に鑑みると、シュラッターは決して「神に対する」信仰心ではなく、バクティとは思想的に全く異なるものであるが、本書に限らず、ヒンディー語で書かれた宗教文献ではシュラッターとバクティは区別して用いられているわけではないように見受けられる。

まともなつて行われ、完遂されたこれは [シュラツダである] 「シュラツダをまともなつて与えられるというそのことによって、それはシュラツダとなる」 「シュラツダをまともなつてこれがシュラツダである」。すなわち、自身の亡くなった祖霊たちを対象にして、信仰心をともなつて行われる特定の行為がシュラツダという語で知られている。それはピトリヤジュニヤとも言われ、その記述は『マヌ法典』などの法典、プラーナ聖典、『勇者ミトラの啓示』³、『シュラツダ儀礼の蔓草』⁴、『シュラツダの本質』⁵、『祖霊への責務』⁶などさまざまな書物に見つけられる。

偉大なる聖仙パラシャラによると、「[ふさわしい] 場所、時、そして受容者^{パートラ}に、捧げるのに相応しい供物など一連の儀礼の規則によって、胡麻（大麦）とダルバ草（クシャ草）そしてマントラと結び付けられ、信仰心をともなつて行われる行為、それがシュラツダである」⁷。

偉大なる聖仙ブリハस्पティと、『シュラツダの本質』に引用された偉大なる聖仙プラスティヤの言葉によると、「牛乳、澄ましバター、蜜を用いて、よく調理された最高の料理を信仰心をともなつて祖霊たちを対象にして、バラモンなどに与えられるようなことが含まれている種々の行為がシュラツダである」⁸。

³ *Vīramitrodaya*. オールチャー（現マディヤ・プラデーシュ州）のヴィーラスィンハ（在位 1605–1627）の命でミトラ・ミシュラによって著された長大な綱要書で、シュラツダの巻（*Śrāddhaprakāśa*）がある。

⁴ *Śrāddhakalpalatā*. バナーラス出身のナンダ・パンディタによって西暦 1603 年以前に書かれたシュラツダについての綱要書である。

⁵ *Śrāddhatattva*. 16 世紀にベンガルのラグナンダナ・バッターチャーリヤによって著されたもので、*Smṛtitattva* としてまとめられる 24 巻の一である。

⁶ *Pitṛdayitā*. 12 世紀半ばにベンガルで活躍したア Niludda によるシュラツダの綱要書で、ラグナンダナによっても多く引用されている。

⁷ 【原註】 *deśe kāle ca pātre ca vidhinā haviṣā ca yat / tilair darbhais ca mantraiś ca śrāddham syāc chraddhayā yutam //* [ふさわしい] 場所で [ふさわしい] 時に、[ふさわしい] 受容者において、規則通りに、ハヴィス<火にくべられるべき供物>をともなつて、胡麻とダルバ草とマントラをともなつて、信仰心をともなわれたもの、それがシュラツダであるべきである。

⁸ 【原註】 *saṃskṛtaṃ vyañjanādḥyaṃ ca payomadhughṛtānvitam / śrāddhayā diyate*

同じように『ブラフマ・プラーナ』においても、シュラーツダの定義が書かれている。「[ふさわしい] 場所、時、そして受容者において、規則に従って、シュラツダーをもって祖霊たちを対象にしてバラモンたちに与えられるもの、それがシュラーツダである」⁹。

シュラーツダ執行者にももたらされる安寧

規則に従って、落ち着いた心でシュラーツダを執行する者は皆、罪を免れて解脱を獲得する。そして再び輪廻のサイクルには戻ってこない¹⁰。したがって人は、祖霊たちの満足と自身の安寧のためにもシュラーツダを必ず執行すべきである。この世において、シュラーツダを執行する者にとってシュラーツダよりも優れた、安寧を生み出す手段は他にない。この真理は、偉大な聖仙スマントゥによっても確認されている——

シュラーツダ以上に優れた [安寧のための] 手段は他に示されない。それゆえに賢者たちは、あらゆる努力をしてシュラーツダを

yasmāc chrāddham tena nigadyate // よく調理され、おいしく味つけられ、牛乳、蜜、澄ましバターが混ぜられたものが、信仰心をともなって与えられるということによって、それはシュラーツダと呼ばれる。

K. V. Rangaswami Aiyangar が再構成した『ブリハस्पティ法典』(*Bṛhaspatismṛti*) では、シュラーツダの章 (*Śrāddhakāṇḍa*) 36 に当該詩節が収録されている。『葬祭の光明』原書では *vyañjanādyaṃ* となっているが、Aiyangar エディションの *vyañjanādhyam* の方が意味として適切であるためそちらを採用した。

⁹ 【原註】 *deśe kāle ca pātre ca śrāddhayā vidhinā ca yat / pitṛṇ uddīśya viprebhyaḥ dattam śrāddham udāhṛtam* // [ふさわしい] 場所と時間と受容者において、シュラツダーをともなって、規則に従って、祖霊たちを対象にして、バラモンたちに与えられることがシュラーツダと呼ばれる。

¹⁰ 【原註】 *yo 'nena vidhinā śrāddham kuryād vai śāntamānaśaḥ / vyapetakalmaṣo nityam yāti nāvartate punaḥ* // (*Kūrmapurāṇa*) この規則に従って、落ち着いた心でシュラーツダを執行するような者は、常に罪から解放されて [天界に] 行き、二度と輪廻しない。

すべきである¹¹。

すなわち、この世界において、シュラッタよりも優れた、安寧を与える手段はない。それゆえに、賢者は努力してシュラッタを執行すべきである。

そればかりか、シュラッタはその執行者の寿命を長くし、息子を授けて家系を存続させ、財産と食べ物を豊富にし、体に猛々しい力を行き渡らせ、発展を促し、名声を広め、あらゆる種類の幸福を授けるのである¹²。

シュラッタによる解脱

このようにシュラッタはこの世の人生を幸福に満ちたものにし、さらにあの世も良い状態にして、最後には解脱を授ける——

長寿、子孫、財産、知識、天界、解脱、幸福、そして活世を、
シュラッタによって満足した祖霊たちは授ける。

（『マールカデーヤ・プラーナ』）¹³

すなわち、シュラッタによって満足した祖霊たちはシュラッタ執行者に長寿、子孫、財産、知識、治世、幸福、天界、そして解脱を授ける。

『アトリ・サンヒター』がいうには、息子、兄弟、孫、娘の息子などで、祖霊のための行為（シュラッタ儀礼）に従事する者たちは、必ず最高の到達地を獲得する¹⁴。

¹¹ śrāddhāt parataṃ nānyac chreyas karam udāhṛtam / tasmāt sarvaprayatnena śrāddhaṃ kuryād vicakṣaṇaḥ //

¹² 【原註】 āyuh putrān yaśaḥ svargaṃ kīrtiṃ puṣṭiṃ balaṃ śriyam / paśūn saukhyaṃ dhanam dhānyam prāpnuyāt piṭṛpūjanāt // (Yamasmṛti, Garuḍapurāṇa, Śrāddhaprakāśa) 寿命、息子たち、名誉、天界、名声、発展、力、栄光、家畜たち、幸福、富、食べ物を、祖霊への礼拝によって人は獲得するだろう。

¹³ āyuh prajāṃ dhanam vidyāṃ svargaṃ mokṣam sukhāni ca / prayacchanti tathā rājyam pitarah śrāddhatarpitāḥ // (Mārkaṇḍeyapurāṇa)

¹⁴ 【原註】 putro vā bhrātro vāpi dauhitraḥ pautrakas tathā / piṭṛkārye prasaktā ye te yānti paramaṃ gatim // 息子あるいは兄弟、あるいは娘の息子や息子の息子で、

シュラータを執行する者、その儀礼作法を知っている者、シュラータをするように勧める者、シュラータをすることに同意する者、これら全ての者たちがシュラータの果報を得られるとまで書いてある——

[シュラータをするように] 勧める者と同意する者も、
この世で同じ果報があると考えられている。

(『ブリハスパティ [法典]』)¹⁵

シュラータをしないことによる弊害

我々の聖典は、それを知ることで身の毛がよだつほど恐ろしい、シュラータをしないことによって生じる弊害を述べてきた。従って、シュラータの原理を知っていることとその儀礼のために心づもりをすることは非常に重要である。周知のことだが、死者は[あの世へと向かう]この偉大なる旅において、自身の粗大な身体すら持っていけないのに、道中の糧(食べ物と水)をどうやって持参できようか?それゆえ、彼の親族縁者たちがシュラータ儀礼で彼に与えたものを死者は得るのである。聖典は、死後の団子供えの仕組みを整えた。第一に、葬列[が火葬場に向かう道中]で、6つの団子が捧げられる。それによって大地の守護神の満足と、幽霊や餓鬼によって生じる障りの除去などの目的が達成される。それと同時に、「10の肢体部分(よりのなる)」<火葬後10日間行われる儀礼>で与えられる10の団子によって靈魂は微細な身体¹⁶を獲得する。これは死者の偉大なる旅の始まりに関することである。さてその後、彼に道中の糧(道中の食事すなわち食べ物や水など)の必要性が生じるが、それを「最高の^{ウッタマショーダシ}16

祖霊のための行爲に従事する者たちは、最高の到達地に行く。

¹⁵ upadeśānumāntā ca loke tulyaphalau smṛtau // (Bṛhaspati[smṛti])

¹⁶ ātivāhik sūkṣma śarīr を「微細な身体」と訳した。ātivāhik は ati-vāha 「風よりも速い」の派生語だが、古賀・高橋編『ヒンディー語＝日本語辞書』では ātivāhik で「死後も永続し輪廻の主体となるもの」という意味が登録され、liṅgaśarīr や sūkṣmaśarīr と同じであるとされている。

17)において与えられる団子によって彼は獲得する。親族縁者、息子や孫などが「[最高の16]を」与えないと、空腹や喉の渇きで彼はそこで激しく苦しむのである¹⁸。

シュラーツダ非執行者にとっての苦しみ

ここまで、シュラーツダをしないことによる死者の苦しみについて述べてきた。シュラーツダを執行しない人も、ことごとに苦しみに直面しなければならない。[シュラーツダによって供養されない]死者は、やむを得ず、シュラーツダを執行しない自身の親類縁者の血を吸い始める——

愚かさからシュラーツダを執行しない者の血を彼らは飲む。

(『ブラフマ・プラーナ』)¹⁹

17 先に説明があった葬列が火葬場に向かう際に道中で捧げられる6つと、微細な身体を作るための10の団子は合わせて「穢れた16 (*malina-ṣoḍaśī*)」と呼ばれ、火葬後11日目には「中間の16 (*madhyama-ṣoḍaśī*)」と「最高の16 (*uttama-ṣoḍaśī*)」と呼ばれる16個ずつの団子供えが行われる。『葬祭の光明』の181頁からの解説では、「中間の16」では団子1つずつが神格に捧げられている。死霊 (*preta*) やヤマだけではなく、ヴィシュヌやシヴァも対象として含まれている。火葬後10日間の最も穢れの強い時期は過ぎているとはいえ、葬儀に神々が関わってくるのは興味深い。229頁から説明される「最高の16」の手順を見ると、本来は火葬後12ヶ月間に捧げられるべき団子に代わるものであることがわかる。12ヶ月の間に16の団子が捧げられるのは、1ヶ月毎の団子に加えて半月、1.5ヶ月といった節目における団子供えが規定されているからである。「最高の16」の団子供えを行うことによって、シュラーツダが最初に規定された家庭経においては火葬後1年目に行われていた、死者を前3世代の祖霊に合一させる「サピンディーカラナ」という儀礼を12日目に行うことができるのである。

18 【原註】 *lokāntareṣu ye toyam labhante nānnaṃ eva ca / dattaṃ na vaṃśajair yeṣāṃ ye vyathāṃ yānti dāruṇāṃ // (Sumantu)* 別の世界において、[死者たちは]水も食べ物も得られない。そうしたもののたちのために親族たちによって与えられないとき、彼らは激しい苦痛を経験する。

19 *śrāddhaṃ na kurute mohāt tasya raktaṃ pibanti te / (Brahmapurāṇa)*

同時に彼らは呪いをも与える——

祖霊たちは彼に呪いを与えてから、前に進んでいく。

(『ナーガラ・カンダ』)²⁰

そしてこの呪われた家族たちは、生涯、苦しみ続けなければならない。彼らには息子が生まれず、誰も病気なしでおらず、長寿ではなく、どうやっても安寧が得られず、死後には地獄に行かねばならないのである²¹。

ウパニシャッドにおいても言われているが、**神々と祖霊に対する儀礼を怠ってはならない**(『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』1.11.1)²²。すなわち、神々と祖霊たちの儀礼において人は決して怠慢であってはならない。怠慢から害が発生するのである。

祖霊たちにとってシュラーツダはどのように獲得されるのか？

シュラーツダで与えられた食べ物などの事物を、祖霊たちはどのようにして得るのか。これ知りたいと思うのは自然なことである。なぜなら、それぞれの業に従って、死後、靈魂はさまざまな来世を得るからである。神になる者もいれば、祖霊、死霊、象、アリ、プラタナスの木、そして草になる者たちもいる。シュラーツダで与えられた小さな団子で、象の腹はどうして満たされようか？同じように、アリは大きな団子をどうして食べることができようか？神々は甘露によって満足するのに、団子によってどうして満足しようか？これらの質問に対して、聖典は明確に答えている。[シ

²⁰ ... pitaras tasya śāpaṃ dattvā prayānti ca / (*Nāgarakhaṇḍa*)

²¹ 【原註】(ka) na tatra vīrā jāyante nārogyaṃ na śatāyusaḥ / na ca śreyo 'dhigacchanti yatra śrāddhaṃ vivarjitaṃ // (*Hārītasṃṛti*) シュラーツダが放棄される場合、彼らは勇者(息子)を勝ち得ず、病気でない状態ではおらず、長寿でおらず、高い幸運を得ることはない。

(kha) śrāddhaṃ etan na kurvāṇo naraḥ pratipadyate // (*Viṣṇusṃṛti*) (Olivelle のエディションでは śrāddhaṃ eteṣv akurvāṇo naraḥ pratipadyate /76.2/) シュラーツダを執行しない者は地獄に到達する。

²² devapitṛkāryābhyāṃ na pramaditavyam (*Taittirīya-upaniṣad* 1.11.1)

シュラーツダで唱えられる死者の]名前と^{ゴートラ}氏族名を頼りにして、^{ヴィシュヴェデーヴァ}一切神や^{アグニシュヴァ}火神によく食べられた者などの神的な祖霊が、供物を祖霊たちに獲得させている²³。もし父が神に生まれ変わっているとしたら、与えられた食べ物に彼にそこで甘露となって獲得される。人間に生まれ変わっていたら穀物の形で、家畜に生まれ変わっていたら草の形で、彼はそれく与えられた食べ物>を獲得する。蛇などに生まれ変わっていたら風の形で、^{ヤグシヤ}夜叉に生まれ変わっていたら葉っぱの形で、そして他の生まれ変わりにおいても、シュラーツダで与えられたものは、享樂を生み出し満足させるものの形で獲得され、彼を必ず満足させる²⁴。牛舎で見失った母を子牛がどうにかし

²³ ここで「神的な祖霊」は、一般的な祖霊すなわち親族の死者で適切な儀礼を経て祖霊になり、生前の名前を呼ばれて団子を供えられる存在とは区別されている。神的な祖霊として言及されている一切神（ヴィシュヴェデーヴァ）と火神によく食べられた者（アグニシュヴァータ）を説明しておく。シュラーツダの儀礼過程において、父方と母方それぞれの一切神は祭場に呼ばれて供物（団子はなし）が捧げられる。父・祖父・曾祖父などの祖霊たちに対して儀礼をする際には聖紐を右肩からかけるのに対して、一切神に対して儀礼をする際には、通常時や神に対する儀礼執行時と同じく聖紐を左肩からかけるため、シュラーツダの儀礼中には聖紐が何度もかけ直される。このことからわかるように、一切神は神に近い扱いを受ける。曾祖父よりも前の3世代は、団子を供えたあとの残りかすを祭主が手をぬぐうことによって得る（*lepabhāgin*「拭われたものを分け前とする者」）という見方があり、一切神は、それよりもさらに前の世代の死者たちで、死後長い期間を経て浄性が高くなった祖霊であると考えられる。「火神によく食べられた者」（*agni-ṣv-ātta*）は火葬によってきちんと浄化された者という意味で、この祖霊は『リグ・ヴェーダ』第10巻15章の祖霊の歌の中にも登場する（10.15.11）。これも直近で亡くなった、個性をもつ親族の死者とは別者である。なお『ヤージュニャヴァルキヤ法典』には、「シュラーツダの神格としての祖霊たちはヴァス神群、ルドラ神群、アーディティヤ神群である。シュラーツダで満足させられた彼らは人間の祖霊たちを満足させる（*vasurudrādītisutāḥ pitarāḥ śrāddhadevatā / prīṇayanti manuṣyaṇām pitṛṇ śrāddhena tarpitāḥ // 1.266*）」という記述がある。

²⁴ 【原註】 *nāmamantrās tathā deśā bhavāntaragātān api / prāṇinaḥ prīṇayanty ete tadāhāratvam āgatān // devo yadi pitā jātaḥ śubhakarmānuyogataḥ / tasyānnam amṛtaṁ bhūtvā devatve `py anugacchati // martyatve hy annarūpeṇa paśutve ca ṭṭṇaṁ bhavet /*

て探し出すように、マントラは、各事物を生まれ変わり先にどうにかして届ける。名前、氏族名、心からの信仰心、適切な^{サンカルブ}宣言を伴って与えられたものを、帰依心をともなって発声されたマントラは彼らのもとに届ける。たとえ魂が何百もの生まれ変わりを経験しても、[捧げられたものによる]満足は彼の元に届くのである²⁵。

バラモンの饗応によってもシュラーツダが達成されること

一般的に、シュラーツダには2つのやり方がある。ひとつは団子供えで、もうひとつはバラモンの饗応である。死後、神々の世界や祖霊たちの世界に行った者たちは、マントラによって呼ばれる時、それぞれの世界から瞬

śrāddhānam vāyurūpeṇa nāgatve 'py upatiṣṭhati // pānam bhavati yakṣatve nānābhogakaram tathā / (*Mārkaṇḍeyapurāṇa*, *Vāyupurāṇa*, *Śrāddhakalpalatā*) これら名前とマントラ、そして[適切な]場所は、各々の食べ物を届けて、別の存在になった生き物たちをも喜ばせる。もし父が、高潔な行いに基づいて神に生まれ変わっていたら、その食べ物は甘露となって、神のもとにも届くのである。人間になっていたら穀物の形で、家畜になっていたら草になるだろう。シュラーツダで捧げられた食べ物は風の形で蛇になっても届くのである。夜叉になっていたら飲み物になる。様々な、享樂を生み出すものにもなる。

²⁵ 【原註】 (ka) yathā goṣṭhe praṇaṣṭām vai vatso vindeta mātaram / tathā taṃ nayate mantra jantur yatrāvatiṣṭhate / nāma gotraṃ ca mantraś ca dattam annaṃ nayanti tam / api yoniśataṃ prāptāms tṛptis tān anugacchati // (*Vāyupurāṇa Upodghāta pā*. 83.119–20) 牛舎で見失われた母[牛]を子牛が見つけるように、子孫がいるところに、マントラは彼を導く。名前と氏族名、マントラは、与えられた食べ物を彼のもとに導く。あらゆる姿に生まれ変わっていても、その人たちのもとに満足が届くのである。

(kha) nāmagotraṃ pitṛṇām tu prāpakam havyakavyayoḥ / śrāddhasya mantratas tattvam upalabhyeta bhaktiṭaḥ / agniśvāttādayas teṣām ādhipatyē vyavasthitāḥ / nāmagotrās tathā deśā bhavanty udbhavatām api // prāṇinaḥ prīṇayanty etad arhaṇām samupāgatam / (*Padmapurāṇa*, *Sṛṣṭikhaṇḍa* 10.38–39) 名前と氏族名は、祖霊たちのもとに供物を届けさせる。シュラーツダのマントラによって、帰依心によって、[シュラーツダで捧げられたものの]本質が獲得される。火神によく食べられた者などは彼ら(祖霊たち)を司る。名前と氏族名、場所は、目に見えるものにもなる。届くに値するものとなって、生まれ変わった生物たちを喜ばせる。

時にシュラーダの場にやってくる。そして招待されたバラモンを媒介として食事をする。微細なものを受け取る者となったことによって、食事のほんの小さなかけらの匂いを嗅ぐことで彼らの食事は済み、彼らは満足する。ヴェーダは、バラモンたちに食事をさせることによって、それく食事>が祖霊たちに届くことを伝えている——

この粥を私はバラモンたちに分配する、世界を勝ち取り、天界
[に到達する] ようなヴィシュターリー祭式において。

（『アタルヴァ・ヴェーダ』 4.34.8）²⁶

(*imam odanam*) この粥という語で示された食事を (*brāhmaṇeṣu ni dadhe*) 私はバラモンたちのところに置こうとしている。この食事は詳細に [祖霊たちと] 結び付けられており、天界を獲得するものである。

この真理を明確にしながらマヌはこう書いている——

神々は常に彼の口から供物（ハグヤ）を食し、祖霊も供物（カ
グヤ）を食す。いったい存在するもののいかなるものが彼（バ
ラモン）に勝るであろうか。

（『マヌ法典』 1.95）²⁷

²⁶ *imam odanaṃ ni dadhe brāhmaṇeṣu viṣṭāriṇaṃ lokajitaṃ svargam / (Atharvaveda 4.34.8)*

Ralph T. H. Griffith の『アタルヴァ・ヴェーダ』の翻訳によると、この詩節が引用されている第4巻34章は、粥 *odana* を主たる供物とする *Viṣṭārī* と呼ばれる特定の儀礼を賞賛するものである。他方で『葬祭の光明』の著者は *viṣṭāriṇaṃ* を「詳細に (*viṣṭār se*)」と解釈しているようである。

²⁷ *yasyāsyaena sadāśnanti havyāni tridivaukasaḥ / kavyāni caiva pitarah kiṃ bhūtam adhikaṃ tataḥ // (Manusmṛti 1.95)*

この箇所は、渡瀬の訳では「バラモンの使命」とされた小節からの引用である。この詩節の前の 1.93-94 は次のようである。「バラモンは、身体の上最上部より生まれたがゆえに、最初に生まれたがゆえに、そしてヴェーダの保持者であるがゆえに、[自らに定められた] 本来の生き方（ダルマ）に従って、このいっさいの世界の主である。スヴァヤンブーは、供物を神々と祖霊に運ぶために、またこのいっさいの守護のために、苦行を行なって自らの口から最初に彼（バラ

すなわち、バラモンの口から神々はハヴヤク祭火に献じられる供物>を、祖霊はカヴヤク祖霊に捧げられる供物>を食べるのである。

祖霊たちについてはこのように書かれている。彼らは自身の行いの影響のもと、天界で、風的な身体をまとって暮らしている。天界に住むこれらの祖霊たちは、「シュラーダの時がやってきました」と聞くだけで満足する。彼らは「マノージャヴァク心のように素速いもの>」である、すなわち彼ら祖霊たちの進む速度は^{マナス}心の速度のようなのである。彼らは念想するだけでシュラーダの祭場にやってきて、そしてバラモンたちと一緒に食事をして満足する。彼らの身体は風でできているので、彼らを誰も見ることができない²⁸。

この主題については、『マヌ法典』においても言われている。シュラーダに招かれたバラモンたちに、祖霊たちは隠れた姿で住みついている。氣息の姿で、彼らくバラモン>が動く時には動き、座る時には座る。シュラーダの時に招待されたバラモンたちと一緒に、氣息の姿あるいは風の姿で祖霊たちはやってくる。そしてそのバラモンたちと一緒に座って食事を²⁹する。死後、祖霊たちは微細な身体をまとうので、彼らのことを誰も見ることができない。『シャタパタ・ブラーフマナ』でも言われている——「祖

モン)を創造した。」(渡瀬訳より引用。語の統一を図るため、渡瀬訳中の「ブラーフマナ」を「バラモン」に変更。)

²⁸ 【原註】*tasya te pitarah śrutvā śrāddhakālam upasthitam / anyonyam manasā dhyātvā sampatanti manojavāḥ // brāhmaṇais te sahaśnanti pitaro hy antarikṣagāḥ / vāyubhūtās tu tiṣṭhanti bhuktvā yānti parāṃ gatim // (Kūrmapurāṇa U. Vi. 22.3-4)* 心のように素速いかの祖霊たちは、彼がシュラーダの時が近づいた[と言う]のを聞いて、心によって念想して、いっせいにやってくる。虚空を³⁰通って進むかの祖霊たちはバラモンたちとともに食べる。風のような者である彼らは、食べてから、非常な速さで去っていく。

²⁹ 【原註】*nimantritān hi pitara upatiṣṭhanti tān dvijān / vāyuvac cānugacchanti tathāsīnān upāsatē // (Manusmṛti 3.189)* なぜならば、祖霊たちは招かれたバラモンたちのそばにおり、[彼らが歩む時は]風のように付き従い、座るときは[祖霊たちも]近接して座るからである。

霊たちは人間たちからは隠れているかのようである(2.3.4.21)」³⁰。すなわち微細な身体をまとっているから、祖霊たちは人間から隠れた状態にいるのである。したがって、微細な身体をまとっているという理由で、彼らは水、火、風を主とする者たちである。それゆえこの世とあの世を行き来するのに何の障害もないのである。

十分な財がない場合でもシュラータを完了させられること

経済状況は全ての人同一ではない。時折、財が欠如することもある。そのような状況でもシュラータの儀礼は必須である。この見地から、聖典は財の大きさに応じて規則を定めた。

(1) もし [シュラータで捧げる] 食べ物や衣の購入に金が足りないような状況であれば、野菜によってシュラータを行うべきである——

それゆえに人は、帰依心をともなって、野菜によっても規則に従ってシュラータを [執行すべきである]³¹。

(2) もし野菜を買うのにも金が足りないのならば、草木などを売って金を集め、その金で野菜を買ってシュラータを行うべきである³²。

(3) 地域や時期によっては、材木すら得ることができない。聖典は、そのような状況下では草でシュラータができると伝えた。草を刈りとりて牝牛に食べさせるべきである。このやり方は『パドマ・プラーナ』が定めた。それと一緒に、それく『パドマ・プラーナ』>はこれに関係するひとつの小さな出来事を伝えている——ある人は困窮して大変に苦しんでいた。彼のもとには野菜を買えるほどの金もなかった。野菜によってすらシュラータを行える状況に彼はなかった。その日はシュラータを行うべ

³⁰ tira iva vai pitaro manuṣyebhyaḥ (Śatapathabrāhmaṇa 2.3.4.21)

³¹ tasmāc chrāddham naro bhaktyā śākair api yathāvidhi /

³² 【原註】 tṛṇakāṣṭhārjanam kṛtvā prārthayitvā varāṭakam / karoti pitṛkāryāni tato lakṣaḡuṇam bhavet // (Padmapurāṇa, Sṛṣṭi. 52.310) 草木を集めて金を獲得し、祖霊への儀礼をすると、[効果は] 何十万倍にもなる。

き日であった。[祖霊への儀礼を執行すべき] 正午³³にもなっていた。この時間帯をすぎるとシュラータは執行不可能であった。哀れな彼は慌てふためき、泣き出した。シュラータをどうやって行えば良いだろうか？ある賢者が彼に助言をした。「すでに正午になっている。急いで草を刈りとり、祖霊たちの名前を唱えながら牝牛に食べさせよ。」彼は走っていき、草を刈りとり、牝牛に食べさせた。このシュラータの果報として、彼は神々の世界に到達した——

このように、功德ある行爲の結果として、彼は神々の世界に行った。

(『パドマ・プラーナ』 52.319)³⁴

(4) 草すらも得られない状況になる場合もある。そうしたらシュラータをどう実施するのか？聖典は次のように解決を提示した。シュラータ執行者にとって、地域や時期の影響で草も得ることが不可能であるような場合、シュラータの代わりとなる次の方法がある。シュラータ執行者は人がいない場所に行き、両腕をあげて、以下に書かれた詩節によって祖霊たちに祈るべきである——

私には富もなければ財もなく、自身の祖霊たちにシュラータで捧げるのにふさわしい他のものもない。私はここにいる。
祖霊たちが帰依心によって満足するように。私によってこの両腕は空に掲げられた。

(『ヴィシュヌ・プラーナ』 3.14.30)³⁵

³³ ここで「正午」と訳した部分は、原文では *kutap kāl* である。M. Monier=Williams の *Sanskrit-English Dictionary* では、*kutapa* について次のように説明されている。the eighth Muhūrta or portion of the day from the last Daṇḍa of the second watch to the first of the third or about noon (an eligible time for the performance of sacrifices to the Manes) MBh. xiii , 6040 MatsyaP. (Monier=Williams 1899: 286).

³⁴ *etat puṇyaprasadena gato 'sau suramandiram / (Padmapurāṇa, Śṛṣṭi 52.319)*

³⁵ *na me 'sti vittaṃ na dhanam ca nānyacchrāddhopayogyam svapitṛṇn ato 'smi /*

すなわち、おお私の祖霊たちよ。私はシュラーツダにふさわしい財も、食べ物などもない。あなた方に対する信仰心と帰依心はある³⁶。私はそれらによってあなた方を満足させたい。あなた方が満足した状態になるように。私は（聖典の指令に従って）両腕を空に掲げている。

シュラーツダの儀礼において、資源が備わっている人は出し惜しみをしてはならない。自身が得られる資源で、[それぞれに]合うような仕方で、シュラッターを伴ったシュラーツダを必ず行うべきである。

上述の選択肢から明確にわかるのは、何らかの仕方でシュラーツダは必ずやるべきということである。聖典は明確な言葉でシュラーツダの規則を与えており、行わないことを禁じている。

シュラーツダは必ず行うべきである——

それゆえ、根菜あるいは果物、あるいは献水儀礼によって、祖霊たちを満足させるべきである³⁷。

シュラーツダを放棄しないように——

決してシュラーツダを放棄してはならない。

（『ダルマシンドウ』）³⁸

シュラーツダ執行の資格をもつ者たち

父のシュラーツダを執行する権利は主に息子にある。何人か息子たちがいる場合には、火葬から 11 日目、12 日目までの全ての儀礼は最年長の息子が行うべきである。特別な状況下では、年長者の指示によって弟も〔シ

tṛpyantu bhaktyā pitaro mayaitau kṛtau bhujau vartmani mārutasya // (Viṣṇupurāṇa 3.14.30)

³⁶ サンスクリット語の原文には「信仰心（シュラッター）」の語はないが、その訳として示されているヒンディー語の文章には「信仰心と帰依心（バクティ）」と併記されている。註 2 参照。

³⁷ ato mūlaiḥ phalair vāpi tathāpy udakatarpaṇaiḥ / pitṛtṛptim prakurvīta //

³⁸ naiva śrāddham vivarjayet / (Dharmasindhu)

ユラーツダを] することができる。もし全ての兄弟が属する拵大家族であれば、毎年の命日のシュラーツダも長男によって一箇所で完了させることができる。もし息子たちが別々に暮らしていたら、毎年のシュラーツダなどは別々に行うべきである³⁹。

息子がいない場合については、聖典においてシュラーツダ執行の資格者のためのさまざまな制度がある。『法典の集成』(*Smṛtisamgraha*) や『シュラーツダ儀礼の蔓草』によれば、シュラーツダの執行者は息子、孫、ひ孫、外孫(娘の息子)、妻、兄弟、甥、父、母、息子の嫁、姉妹、姉妹の息子、サピング親族⁴⁰、ソーダカ親族⁴¹であると言われている。——これらの中

³⁹ 【原註】 (ka) mṛte pitari putrena kriyā kāryā vidhānataḥ / bahavaḥ syur yadā putrāḥ pitur ekatravāsinaḥ // sarveṣāṃ tu mataṃ kṛtvā jyeṣṭhenaiva tu yat kṛtam / dravyeṇa cāvibhaktena sarvair eva kṛtam bhavet // (*Vīramitrodaya*, *Śrāddhaprakāśa* における Marīci の言葉) 父が亡くなった時、息子によって儀礼は、規則に従って執行されるべきである。もし息子が多くいて、同じ場所に住んでいる場合には、全ての者たちを代表して最年長の息子によって儀礼が行われる。分けられていない材料によって、全ての者によって行われるべきである。

(kha) ekādaśādyāḥ kramaśo jyeṣṭhasya vidhivat kriyāḥ / kuryur naikaikaśaḥ śrāddham ābdikaṃ tu pṛthak pṛthak // (*Vīramitrodaya*, *Śrāddhaprakāśa* における Pracetā の言葉) 【火葬後 11 日目などの儀礼は順番に、最年長の息子が規則に従って行うものである。別々に行うべきではない。他方で毎年のシュラーツダはそれぞれに行う。】

⁴⁰ 字義通りには、団子を同じくする者。【原註】自身を入れて前 7 世代までの家族。

⁴¹ 字義通りには、水を同じくする者。【原註】8 代前から 14 代前までの祖先の家族。mūlapuruṣaṃ ārabhya saptamaparyantaṃ sapinḍāḥ, aṣṭamam ārabhya caturdaśapuruṣaparyantaṃ sodakāḥ, pañcadaśam ārabhya ekaviṃśatiparyantaṃ sagotrāḥ / pitrādayas trayāś caiva tathā tatpūrvajāś trayāḥ // saptamaḥ syāt svayaṃ caiva tatsāpinḍyaṃ budhāiḥ smṛtam / sāpinḍyaṃ sodakaṃ caiva sagotraṃ tac ca vai kramāt // ekaikaṃ saptakaṃ caikaṃ sāpinḍyakam udāhṛtam // (*Laghvāśvalāyanasmṛti* 20.82–84) 基本となる人から 7 世代目までがサピングたちである。8 世代目から 14 世代目までがソーダカたちである。15 世代目から 21 世代目までがサゴートラたちである。父などの 3 人<父・祖父・曾祖父>およびその祖先たち 3 人<曾祖父の父・祖父・曾祖父>、7 番目が自分自身となる。それが、サピング(同じ

で、それぞれ前の人がいなければ、順番に、後の人たちがシュラードダを執行する資格がある⁴²。

『ヴィシュヌ・プラーナ』の言葉によれば、息子、孫、ひ孫、兄弟、甥、あるいは、自身のサビンダの範囲の中で生まれた男性のみがシュラードダなどの儀礼をする資格がある。もしこれら全ての人がいなければ、サマーノダカ親族⁴³の範囲あるいは母方のサビンダあるいはサマーノダカ親族にその資格がある。母方、父方の両方の家系が途切れてしまっている場合には、妻がこの儀礼を行うべきである。あるいは（もし妻がいなければ）一緒に暮らす者たちのうち誰かが行うべきである。あるいは親族のいない死者の〔儀礼〕資金で、王が彼の全ての死霊に対する儀礼を行わせるべきである⁴⁴。

団子)に属する者と賢者たちによって知られた。サビンダに属する者、ソーダカ、サゴートラは順番に、それぞれ7世代ずつである。ひとつがサビンダに属する者と言われる。

⁴² 【原註】 *putraḥ pautraś ca tatputraḥ putrikāputra eva ca / patnī bhrātā ca tajjaś ca pitā māta snuṣā tathā // bhaginī bhāgineyaś ca sapinḍaḥ sodakas tathā / asannidhāne pūrvaśāṃ uttare piṇḍadāḥ smṛtāḥ // (Smṛtisamgraha, Śrāddhakalpalatā)* 息子、孫、その息子<ひ孫>、プトリカー<自身の息子を父に与えることを約束して結婚した娘>の息子、妻、兄弟、甥、父、母、息子の嫁、姉妹、姉妹の息子、サビンダ、ソーダカ。前の者たちがいけない場合には、後ろの者が団子を与える者であると知られている。

⁴³ 「サマーノダカ」は *samāna-udaka* で、先のソーダカ (*sa-udaka*) と同義である。

⁴⁴ 【原註】 *putraḥ pautraḥ prapautro vā bhrātā vā bhrātṛsantatiḥ / sapinḍasantatir vāpi kriyārho nṛpa jāyate // teśāṃ abhāve sarveśāṃ samānodakasantatiḥ / mātṛpakṣasapinḍena sambaddhā ye jalena vā // kuladvaye 'pi cocchinne strībhīḥ kāryāḥ kriyā nṛpa // saṅghātāntargatair vāpi kāryāḥ pretasya ca kriyāḥ / utsannabandhurikthād vā kārayed avanīpatiḥ // (Viṣṇupurāna 3.13.30–33)* 息子、孫、ひ孫、あるいは兄弟や甥、あるいはサビンダの息子が、儀礼をする資格のある者に割り当てられるのだ、王よ。もしこれら全ての人がいなければ、サマーノダカの息子が〔割り当てられる〕。母方のサビンダとして関係付けられた者たち、あるいは水によって〔関係づけられた〕者たちが〔割り当てられる〕。母方、父方の両方の家系が途切れてしまっている場合には、妻たちによって儀礼がなされるべきで

ヘーマードリによると、父の団子供えなどの全ての儀礼は、息子こそがやるべきである。息子がいなければ妻が、妻がいなければ同腹の兄弟が行うべきである⁴⁵。

『マールカンデーヤ・ブラーナ』によれば、王は全てのヴァルナの兄弟であるため、シュラッタの資格者が皆いない場合、王はその亡くなった人の資金で、彼のジャーティの同胞たちによってしっかりと火葬などの全ての葬送儀礼⁴⁶を行わせるべきである⁴⁷。

シュラッタの種類

聖典にはシュラッタのさまざまな種類が述べられている。ここでは、非常に重要であり、実施されるべきシュラッタのみを記述する。

『マツヤ・ブラーナ』では、3種類のシュラッタが伝えられている—

^{ニツタイヤ}日常的、^{ナイミッタカ}機会的、^{カームヤ}任意的という3種類のシュラッタがあると
言われる⁴⁸。

ある、王よ。あるいは一緒に暮らす者たちのうち誰かが行うべし。絶えた家を継承した者から [誰かが]、あるいは王が行わせるべきである。

⁴⁵ 【原註】 *pituh pureṇa kartavyā piṇḍadānodakakriyā / putrābhāve tu patnī syāt patnyabhāve tu sodaraḥ //* (Hemādri [*Caturvargacintāmani*] における Śaṅkha の言葉) 団子供えや水の捧げは、父の息子によって行われるべきことである。息子がいない場合には妻が、妻がいなければ同腹の兄弟が [行う]。

⁴⁶ ここで葬送儀礼と訳したのは、*aurdhvadaiḥik kriyā* である。*aurdhvadaiḥik* は字義的には「[死の] 後の身体に関わる」である。遺体処理に関わるものという意味で、葬送儀礼を指す。

⁴⁷ 【原註】 *sarvābhāve tu nṛpatiḥ kārayet tasya rikthataḥ / tajjātīyena vai samyag dāhādyaḥ sakalāḥ kriyāḥ // sarveṣām eva varṇānām bāndhavo nṛpatir yataḥ //* (*Mārkaṇḍeyapurāṇa*, *Śrāddhakalpalatā*) 王はすべてのヴァルナの同胞であるため、[葬祭の資格者の] すべてがいなければ、王がそれを引き継いで行わせるべきである。彼<死者>のジャーティの者によって同じように火葬などのすべての儀礼が [実施されるべきである]。

⁴⁸ *nityaṃ naimittikaṃ kāmyaṃ trividhaṃ śrāddham ucyate /*

日常的、機会的、任意的の区分によって、シュラーツダは3種類のものがある。

『ヤマ法典』には5種類のシュラーツダの記述がある——日常的、機会的、任意的、^{ヴリッディ}繁栄、^{パールヴァナ}節目の⁴⁹——毎日行われるシュラーツダを日常的なシュラーツダという。そこでは一切神く註23参照は登場せず、また〔儀礼が〕できない状況においては水を捧げることのみによってもこのシュラーツダは完了する⁵⁰。そして一人に対する^{エーコーツディシュツダ・シュラーツダ}シュラーツダを機会的なシュラーツダという。そこでも一切神は登場しない。何らかの願望を実現させるために行われるシュラーツダを^{カームヤ・シュラーツダ}任意的なシュラーツダという。何らか状況が向上するようときや、息子の誕生や結婚の時などめでたい儀礼において行われるシュラーツダのことを^{ヴリッディ}繁栄のシュラーツダ（^{ナーンディー}喜びのシュラーツダ）という⁵¹。祖霊の半月、朔の日、あるいは^{パールヴ}節目の日く黒分白分それぞれの8日目と14日目あるいは何らかの祭日くなどに、〔一切〕神をともなっておこなわれるシュラーツダを^{パールヴァナ・シュラーツダ}節目のシュラーツダという。

『ヴィシュヴァーミトラ法典』および『バヴィシュヤ・プラーナ』においては、日常的、機会的、任意的、繁栄、節目の、^{サヒンダナ}団子をともにする、^{ゴシュティー}集会、^{シュッディアルグ}清めのための、^{カルマ}儀礼の部分としての、^{ダイヴイカ}神的小の、^{ヤートラールグ}巡礼のための、そして

⁴⁹ 【原註】 nityam naimittikam kāmyam vṛddhiśrāddham athāparam / pārvaṇam veti vijñeyam śrāddham pañcavidham budhaiḥ // 日常的、機会的、任意的、繁栄のシュラーツダ、そしてさらに節目のというのが5種類のシュラーツダであると賢者たちによって知られている。

⁵⁰ 【原註】 ahanyahani yac chrāddham tan nityam iti kīrtitam / vaiśvadevavihīnam tad aśaktāv udakena tu // (Bhaviṣyapurāṇa) 毎日行われるシュラーツダが日常的であると言われる。一切神への儀礼は含まれない。儀礼ができない場合には水によって〔完了される〕。

⁵¹ めでたい時に行われるシュラーツダは、ヴリッディシュラーツダやナーンディーシュラーツダという名称の他に、アーブユダイカ ābhyudaika シュラーツダやナーンディームカ nāndīmukha シュラーツダとも呼ばれる。それぞれ、abhyudaya すなわち何らかが開始されたり向上することに関するシュラーツダ、「喜びの顔をした〔祖霊〕」に対するシュラーツダという意味である。

成長のための^{フシユテイアルダ}——これらの 12 種類のシュラーツダが伝えられている⁵²。
ほとんど全てのシュラーツダは、上記の 5 つのシュラーツダに組み入れることができる。

死霊の団子を祖霊たちの団子に合一させる過程があるシュラーツダを^{サビンダナ・シユラーツダ}という。集団で行われるシュラーツダを^{ゴーシユテイー・シユラーツダ}集会のシュラーツダという。清めのためにバラモンの饗応が行われるシュラーツダを^{シュッテイアルダ・シユラーツダ}清めのためのシュラーツダという。第 7 日目などのティティに、特別な供物（ハヴヤ）によって神々に対して行われるシュラーツダを^{ダイヴィカ・シユラーツダ}神的シュラーツダという。聖地を目指して別の土地に行く際に澄ましバターを用いて行われるシュラーツダを^{ヤートラー・シユラーツダ}巡礼のシュラーツダという。身体的なあるいは経済的な向上のために行われるシュラーツダを^{フシユテイアルダ・シユラーツダ}成長のためのシュラーツダという。

上述した全ての種類のシュラーツダは、^{シユラウダ}天啓的と^{スマールダ}伝承的の 2 つに分類される。^{ビンダ・ドトリ・キジュニヤ}団子祖霊祭⁵³を天啓的シュラーツダという。そして一人に対する、節目の、聖地く巡礼のシュラーツダから亡くなるまでのシュラーツダを伝承的シュラーツダという。

シュラーツダには 96 回の機会がある。12 ヶ月の 12 の朔の日、サッティヤ・ユガ、トレーター・ユガなどのユガの最初である 4 つの「^{ユガーデー・ティティ}ユガの最初の日」、各マヌ期のはじまりである 14 の「^{マヌアーデー・ティティ}マヌ期の最初の日」

⁵² 【原註】 nityam naimittikam kāmyam vṛddhiśrāddham sapīḍanam / pārvaṇam ceti vijñeyam goṣṭhīm śuddhyartham aṣṭamam // karmāṅgam navamam proktaṁ daivikam daśamam smṛtam / yātrāsv ekādaśam proktaṁ puṣṭyartham dvādaśam smṛtam // 日常的、機会的、任意的、繁栄のシュラーツダ、団子をともにする、節目の、が知られるべきである。集会、清めのための、が 8 番目である。儀礼の部分としての、が 9 番目であると言われ、神的が 10 番目であると記憶される。巡礼における [シュラーツダが] 11 番目であると言われ、成長のための、が 12 番目であると記憶される。

⁵³ 【原註】 ‘amāvāsyaṁ piṇḍapitṛyāgaḥ’ ——この言葉に基づいて、団子祖霊祭は朔の日に行われる。この儀礼を行う資格は祭火設置者 < agnihotrī (アグニホートラを行う者) と書かれているが、āhitāgni という言いの方がサンスクリット語文献では一般的と思われる > にあり、他の人にはない。

54、12のサンクラーンティ⁵⁵、12のヴァイドゥリティ^{ヨーガ}合、12のヴィヤティーパータ^{ヨーガ}合⁵⁶、15のマハーラヤ・シュラーダ^{（祖霊の半月）}、5つのアシュタカー、5つのアヌアシュタカ

54 ラーマ・ダイヴァジュニヤの『吉時の宝珠』(*Muhūrtacintāmaṇi*) (1600年頃) は、4つある各ユガの最初の日および14ある各マヌ期の最初の日が、一年のうちどの日に当たるのかを次のように説明する。manvādyaś tritithī madhau tithiravī ūrje śucau diktithī jyeṣṭhe 'nye ca tithis tv iṣe nava tapasy aśvāḥ sahasye śivā / bhādre 'gnīś ca site tv amāṣṭanabhasaḥ kṛṣṇe yugādyāḥ site go 'gnī bāhularādhayor madanadarśau bhādrāmaghāsīte /1.57/ これを同書に注釈をつけたピャーレー・ラール・ミシュラがヒンディー語で次のように解釈している。括弧つきの語は上記の『吉時の宝珠』本文のどの語が当たるかを示すために引用者が付記したものである。「チャイトラ月 (*madhu*) 白分3日目、満月 (*tithi*)、カールティカ月 (*ūrja*) 白分12日目と満月、アーシャーダ月 (*śuci*) 白分10日目と満月、ジェーシュタ月とパールグナ月 (*anya*) の満月、アーシュヴィナ月 (*iṣa*) 白分9日目、マーガ月 (*tapas*) 白分7日目、パウシャ月 (*sahasya*) 白分11日目、バードラパダ月 (*bhādra*) 白分3日目、シュラーヴァナ月 (*nabhas*) の新月と黒分8日目がマヌ期の最初の日である。その時には結婚などの吉祥な儀礼は行うべきではない。沐浴、布施、シュラーダは行うべきである。カールティカ月 (*bāhula*) 白分9 (*go*) 日目、ヴァイシャーカ月 (*rādha*) 白分3日目、バードラパダ黒分13 (*madana*) 日目、マーガ月新月 (*darśa*) がユガの最初の日である。その時には結婚式など吉祥な儀礼は行うべきではない。」

55 黄道上12宮 (*rāśi*) の分割点を太陽が通過する時点をサンクラーンティという。例えば太陽が人馬宮 (*dhanurāśi*) から磨羯宮 (*makararāśi*) に移る場合は「マカラ・サンクラーンティ」と呼ばれる。

56 「合」と訳されるヨーガはここでは、天体上の惑星が特定の位置関係になることを指す。『吉時の宝珠』では、ヴァイドゥリティ合とヴィヤティーパータ合は、縁起の良い儀礼を避けるべき時として挙げられている (18頁)。

ー⁵⁷、そして5つのプールヴェードユス⁵⁸。これらの96がシュラーツダの機会である⁵⁹。

祥月命日および祖霊の半月においてシュラーツダの執行が必須であること

現代において、多く的人是シュラーツダを無駄なものと考えて実施しない。シュラーツダをする人のうちいくらかの人たちは、儀礼の手順にあるように、規則に従って、信仰心をもってシュラーツダを実施する。しかし多くの人たちは習慣であるからとしてシュラーツダを実施する。実際は、信仰心と帰依心をとめない、聖典に書かれた儀礼の手順で行われるシュラーツダこそ、あらゆる種類の幸福を与えるのである。それゆえ各人は、信仰心をとまって、聖典で述べられたすべてのシュラーツダをしかるべき時に行い続けるべきである。聖典で述べられたすべてのシュラーツダを実施できない人は、少なくとも一年忌と、アーシュヴィナ月の祖霊の半月では必ず自身の亡くなった祖霊たちの亡くなった^{デーティ}日にシュラーツダを行

⁵⁷ アシュタカーは、秋から冬にかけて、黒分8日目に行われる祖霊のための儀礼である。ここでは5回とされているが、P.V. カーネーのまとめによると、『アーシュヴァラーヤナ家庭経』(Āśvalāyanagrhyasūtra)ではマールガシールシャ月、パウシャ月、マーガ月、パールグナ月の黒分8日目という4回のアシュタカーが定められており、マーナヴァ、シャーンカーヤナ、カーディラ、カータカ、カウシータキ、パーラスカラといった多くの家庭経ではパールグナ月以外の3回のアシュタカーが規定されている。『バウダーヤナ家庭経』(Baudāyanagrhyasūtra)などマーガ月の1度のみアシュタカーを定めている文献もある(Kane 1991: 354)。アヌアシュタカーは名前の通り(アヌ「〜に続いて」+アシュタカー)、アシュタカーの翌日に行われるものである。家庭経ではアヌアシュタキヤ anvaṣṭakya という名前で呼ばれている。

⁵⁸ プールヴェードユス pūrvedyus は「前の日」を意味するが、1年のうち5回あるというこの日が具体的にいつを指しているのかは不明である。アシュタカーの翌日がアヌアシュタカーなので、アシュタカーの前の日ということだろうか。

⁵⁹ 【原註】 amāyugamanukrāntidhṛtipātamahālayāḥ / aṣṭakānvaṣṭakā pūrvedyuh śrāddhir navatīś ca ṣaṭ // (Dharmasindhu) 朔の日、ユガ、マス、サンクラーンティ、ドリティ、パータ、マハーラヤ<祖霊の半月>、アシュタカー、アヌアシュタカー、プールヴェードユスがシュラーツダのための96の機会である。

うべきである。祖霊の半月は、祖霊たちと特別な関係がある。

バードラパダ月の白分・望の日から祖霊たちの日が始し、[アーシュヴィナ月の]朔の日まで続く。白分は祖霊たちの夜であるといわれる。それゆえに『マヌ法典』では言われている。——人間たちの1ヶ月が、祖霊たちの1日に相当する。1ヶ月には2つの半月がある。人間たちの黒分は、祖霊たちの活動する昼であり、白分は祖霊たちが寝るための夜である⁶⁰。

これこそが、アーシュヴィナ月の黒分——祖霊の半月に祖霊のシュラッタを行うよう定められている理由である。このようにすることによって、祖霊たちは毎日食事を手に入れる。まさにそれゆえ、聖典では祖霊の半月においてシュラッタを行うことの特別な重要性が書かれている。大仙ジャーバーリはいう——

息子たち、長寿および無病、比類のない富もまた、そして多数の望みのもの、これら5つを、シュラッタを行うと人は手に入れる⁶¹。

[この文章の]意味は次のとおりである。祖霊の半月にシュラッタを行うことによって、息子、長寿、無病、比類のない富、そして望みのさまざまなものが手に入る。

シュラッタの簡潔な式次第

一般的に、少なくとも年に2回はシュラッタを行うことが必須である。そのほかに、朔の日、ヴィヤティーパータ [合] やサンクランティなどの適した機会の日にもシュラッタを行うという規則がある。

⁶⁰ 【原註】pitrye rātryahanī māsaḥ pravibhāgas tu pakṣayoḥ / karmaceṣṭāsv ahaḥ kṛṣṇaḥ śuklaḥ svapnāya śarvarī // (Manusmṛti 1.66) 祖霊にとって夜と昼<1日>は [人間にとっての] 1ヶ月である。両半月がその区分別である。黒 [分] が活動のための [祖霊の] 昼であり、白 [分] は眠りのための夜である。

⁶¹ putrān āyus tathārogyam aiśvaryam atulaṃ tathā / prāpnoti pañcemān kṛtvā śrāddham kāmāś ca puṣkalān //

このサンスクリット語の詩節自体には、「祖霊の半月」への言及はない。

(1) 祥月命日——命日には年忌のシュラーツダを行うべきである。聖典において、命日の日には ^{エーコーツディシュタ} ひとりに対するシュラーツダを行うことが決められている。(いくらかの地域では ^{パールヴァナ} 節目のシュラーツダも行う。) エーコーツディシュタ <eka-uddiṣṭa「ひとりに特化された」> は、たった 1 人の死者のために 1 つの団子を捧げ、少なくとも 1 人、多くても 3 人のバラモンに食事をふるまうという意味である。

(2) 祖霊の半月——祖霊の半月には亡くなった人の命日にあたる ^{ティティ} 日が来たら⁶²、その日に主に節目のシュラーツダを行うのが規則である。できるだけ父の命日にあたる日にはそれをすべきである。節目のシュラーツダでは、父、祖父、曾祖父を、妻と一緒に、すなわち母、祖母、曾祖母のように、祭場の 3 箇所でも 6 人のシュラーツダがなされる⁶³。それとともに、母方の祖父、曾祖父、高祖父を妻を伴って、すなわち母方の祖母、曾祖母、高祖母のように、[母方の祖霊に対しても] 3 箇所でも 6 人のシュラーツダがなされる。それに加えて、さらに 1 箇所が設けられる。そこでは自身に近い親族たちのために団子供えが行われる。それ以外に 2 つの一切神のための場所が設けられる。このように 9 箇所が設けられて節目のシュラーツダがなされる。節目のシュラーツダでは 9 人のバラモンに食事をふるまうべきである。もし数を減らすなら、3 人のバラモンに食事をふるまうことが可能である。もし良いバラモンが見つからない場合は、少なくとも ^{サンディヤー} 朝夕の礼拝などをする高潔なバラモン 1 人に食事を必ずふるまうべきである。

⁶² 祖霊の半月はアーシュヴィナ月の黒分 15 日間である。(バードラパダ月満月を入れて 16 日間とすることもある。) 例えばチャイトラ月に亡くなった人のためのシュラーツダを祖霊の半月に実施する場合、命日のティティが重要になる。命日がチャイトラ月白分トリティーヤー (第 3 ティティ) であれば、祖霊の半月中のトリティーヤーの日にシュラーツダを行うということである。

⁶³ 3 箇所とは、祭場において団子などが捧げられる場所が 3 つ設けられるということだろう。妻と一緒に祀るので 3 箇所でも 6 人分のシュラーツダを行うことになる。